

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K01475

研究課題名（和文）バチカンと国際機構 紛争解決と平和構築のための宗教的視座－

研究課題名（英文）Vatican and the International Organizations -Religion and Peace Building-

研究代表者

松本 佐保（MATSUMOTO, Saho）

日本大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40326161

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：バチカンの国際機関における役割は紛争や戦争の仲介、また気候変動や核の平和利用など多岐に渡る。歴史的には第一次世界大戦期の赤十字との協力による人道的な活動から今日の国連をはじめとする国連の専門機関への関与である。またプロテスタント教会の国際機関のWCC（世界教会協議会）との連携によるものもある。

2020年冬～2023年春はコロナ禍で、海外での史料調査が出来なかったが、国内の研究会で研究成果も報告し、研究水準の向上につとめた。2023年夏には国連の専門機関が集まるジュネーブを中心に欧州に、同年春にはバチカンで新たに公開された史料調査のためにローマに出張した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バチカンの国際機関への関与は国際的な紛争の解決と平和構築である。そうしたバチカンの国際的な平和への貢献の歴史を明らかにすることは、現在の国際紛争の解決のための示唆を得る意義はある。2022年2月に開始したロシアによるウクライナへの軍事侵攻に対し、バチカンは特別使節としてズビ枢機卿をモスクワに、ギャレガー大司教をキーウに派遣し、両国間の仲介を試みている。現時点ではこの仲介は成功に至っていないが、平和構築を目指す国際的な仲介には地道な交渉を要することから、和平に至っていない交渉にも注目することが重要である。ロシア・ウクライナ戦争の背景には宗教問題があり、これの注目することの意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：Due to pandemic of Covid-19, any research trip to abroad was not permitted until summer of 2022. During these period of time I have concentrated for reading the research materials which I had already obtained and purchased the books which are related my research topic, Vatican and International organizations and religion and international affairs. The small research association on studies on United Nations and world affairs has been very useful to listen other researchers' presentations as well as to present my own research papers. I have managed to get a lot of useful feedback. After a restriction for traveling abroad was relaxed I have started my research trip to abroad, Geneva where a lot of International Organizations are open access to their archive documents. In Spring of 2023 I have finally managed to research at the Vatican Apostolic Archive which contains a lot of newly opened historical documents. Thus main expenditure for the budget was used for research trip.

研究分野：国際政治と宗教

キーワード：バチカン 国際機関 国連 平和構築 紛争解決

1. 研究開始当初の背景

バチカン、国連や国連専門機関である国際機構、また国連などとパートナーシップ関係にあるキリスト教系の NGO との関係を通じて、国際的な紛争、とりわけ宗教紛争に関わる問題に関与している。また紛争終結後の地域においても、そこにおける平和構築に教会などの活動を通じて関わっている。しかしこうしたバチカンが国際機関とどう関り、具体的にどのようにして平和構築のための活動を行ってきたか、また行っているかなどの実態が明らかになっていなかった。また戦時においては、戦争終結のための仲介をしてきた実績があるが、具体的に明らかになっていない事例もあった。そのためこれらの事例を、海外に史料収集及びインタビュー調査を実施し、調査研究活動を行う必要があった。同じキリスト教でもプロテスタント教会の国際機関である世界教会協議会(WCC)や赤十字との関りについて、カトリックの総本山のバチカンとの関りを明かにすることも重要であり、国連などとパートナーシップ関係にある NGO でもプロテスタントのキリスト教団体とカトリック団体の活動について、具体的な協力関係や実態がそれほど明確にされていたわけではない。

また国際情勢において顕著になりつつある宗教紛争において、バチカン外交では宗教間対話としてイスラム教との交流など重視していることは分かっていたが、具体的な活動が明確化されていなかった。これらを明らかにすることが、本研究の開始当初の背景である。

2. 研究の目的

バチカンの国際機関における役割は紛争や戦争の仲介、また気候変動や核の平和利用など多岐に渡る。歴史的には第一次世界大戦期の赤十字との協力による人道的な活動から今日の国連をはじめとする国連の専門機関への関与があった。またプロテスタント教会の国際機関の WCC (世界教会協議会)との連携などがあった。これらの事例を世界中の文書館で公開されている史料、特にスイスのジュネーブに多くの本部がある国際機関の史料調査や、かつてこれら国際機関に関わっていた人達にインタビューすることで、宗教機関であるバチカンの、和平や紛争解決への関与を具体的に明らかにすることが、研究の目的である。

3. 研究の方法

主にバチカン使徒文書館、国際機関が集中するスイスのジュネーブ、イギリスの公文書館や国際機関に関わった人物へのインタビュー調査、ポーランドのカトリック及びプロテスタント教会団体によるウクライナ難民の受け入れ状況などの実態調査、というのが研究の方法である。これらを学会や研究会で発表し、フィードバックを貰うことで内容を改善し論文を仕上げるのが研究方法である。数値データ(例えば難民の受け入れ数など)も使用するが、データ分析の使用は最低限にとどめる。

4. 研究成果

夏休みの時期にイギリスやフランス、スイス、春休みの時期にはバチカン市国やイタリアなどに史料収集の調査に出かけることが可能となった。そのため夏にはイギリスの公文書館、フランスの国際機関、そしてスイスのジュネーブでは赤十字や WCC (世界教会協議会)などのキリスト教会の国際機関などで有意義な調査や貴重な史料を入手することが出来た。一方でジュネーブの WCC (世界教会協議会)では、ロシア正教会関係の史料も公開されていることから、バチカンとロシア正教会の関係もある程度把握することが出来た。現在のロシアの戦争にバチカンが和平に関与を試みているが、これは歴史的にロシア正教会とバチカンとの間にコミュニケーションが冷戦期から存在した実態も見えてきた。バチカン使徒文書館に春休み期間に出かけて、新たに公開されたばかりの史料を閲覧することが許され、バチカンが第二次世界大戦中も和平のために仲介的な役割を果たそうとした実態が明らかになってきた。バチカン市国内に存在する以前は未公開であった国務省の史料も見ることが出来た。またローマ市内にあるイエズス会文書館での史料調査を行い、バチカンが関与している草の根的な世界中で行われている援助や支援活動の実態が明らかになり、これらが地域によっては紛争の解決や平和構築にも重要な役割を果たしていることが分かった。これらの史料調査の実績は、研究会やシンポジウムなどで登壇しての学術的な発表や、またアメリカの出版社から刊行された論文集にバチカンの核兵器問題に対する対応や、核の平和利用についての一章分を執筆するなどの業績の発表の機会に恵まれた。

バチカン使徒文書館が3年前に新たに公開した膨大な史料の中には、第二次世界大戦中において中立という立場から戦中は戦争終結にむけて果たした仲介的な役割と、また冷戦期に行った東西関係の仲介など、バチカンの立場が単なる反共産主義であったとも言えないことを裏付ける文書も存在する。これら新しい史料をより組織的に整理し使用することで戦中や戦後・冷戦期の国際関係史を一部書き換える程の重要な歴史的な発見が潜在的に存在することから、今後さらに研究を進めることの重要性をこの科学研究費課題の研究を通じて学んだ。バチカンの紛

争解決は平和構築、もしくは和平仲介の役割は、国境を問わずその範囲は世界に広がり、それは必ずしもキリスト教徒を多数派とする地域に限定されないことも今回の研究課題で分かったことから、アジアや中東などの非キリスト教地域も含めた研究が必要になっていく。そのため異なる地域の専門領域を持ち、時代区分的にも戦前と戦中、そして戦後の冷戦期を専門とする数人の研究者たちを集結された共同研究が今後必至であろう。より規模の大きい研究グループを組織することで、新たな研究発展に繋がることを強く認識した。

具体的な論文と著書、そして学会発表や招聘講演から研究成果について以下に述べる。

(1) 松本佐保著「カトリック教会と国際政治 教皇フランシスコはリベラルな国際秩序を主導できるかー」掲載誌『国際問題』No. 675 (2018年10月)、単著、6~17頁

松本佐保著「フランシスコ教皇来日 核問題と地球温暖化問題へのリーダーシップ」掲載誌『福音宣教』2019年12月号、単著、6~11頁

これら二つの論文ではバチカンの国際連盟や国際連合などの国際機関と関わった歴史的な活動を踏まえて、現在のフランシスコ教皇が具体的に関わっている環境問題についての活動の実態、またこれら活動の理念となった回勅「ラウダ ト・シ」などについて論じたものである。カトリック神学を踏まえた回勅が実際の環境政策、2015年のパリ環境合意について教皇のリーダーシップがいかにコンセンサスを創り出したかを論じたもの。

(2) 松本佐保著「ローマ教皇訪日 三つの意義—核兵器・環境・労働から読み解く」掲載誌『外交(日本外務省セミ・オフィシャル雑誌)』第58巻 2019年11・12月合併号、60~63頁

(1) で扱った環境問題以外にバチカンの国際機関への関与として IAEA との協力関係がある。この IAEA が掲げる核の平和利用や、また核兵器廃絶に向けた取り組み、例えば平和運動を掲げる NGO との協力関係、また唯一の被爆国である日本の広島と長崎への訪問との深い関わりについて論じている。

(3) Saho Matsumoto, 'Vatican's / Holy See's Approach to Nonproliferation: The US and Japan,'
In The Vatican and Permanent Neutrality, Lexington Books, eds. by Marshall J. Breger and Herbert R. Reginbogin, Lexington Books, 2022

松本佐保著「核兵器問題とバチカンと米国と日本」『バチカンに眠る日本の記憶』角川財団、2024年、307-327頁

(2) で扱った IAEA が掲げる核の平和利用や、また核兵器廃絶に向けた取り組み、平和運動を掲げる NGO との協力関係について、冷戦期に遡り、教皇ヨハネパウロ2世の1981年の広島と長崎の訪問、そして米国のレーガン大統領の政権下において、世界のカトリック教会の総本山であるバチカンが、教会内に存在する「正戦論」と「平和論」のせめぎ合いの中で、タカ派として知られたレーガン大統領を、ソ連のゴルバチョフ書記長と間での軍縮条約に繋げていったかを明らかにした論文である。背景には唯一の被爆国である日本とバチカン、として米国との関りも無視できない要因となっている。単なる平和主義(理想主義でリベラリズム)ではなく、極めてリアリズムに向き合うバチカン外交の実態を、核兵器問題と IAEA との関りで論じた成果である。

(4) 書籍刊行：松本佐保著『バチカンと国際政治 宗教と国際機構の交錯』千倉書房、2019年4月、単著、全336頁

上記の(1)~(4)の論文の内容を、一部を除いて包括的に含んだ著書を刊行した。これにはバチカンの国際機関や国際政治への具体的な関与について、歴史的な史料を史料して実証的に論じている。また現代的な宗教紛争の問題や環境問題などについての論考も含む内容となっている。

(5) 学会発表と招聘講演

松本佐保「バチカンとWCC(世界教会協議会)とのエキュメニカルな活動について 第二バチカン公会議を中心に」第14回日本ピューリタニズム学会研究大会 2019年6月日本キリスト教大学(ICU)に於いて

Saho Matsumoto, 'The Vatican and international organizations, Christianity, Ecumenism and NGOs', Seminar in University of Napoli Orientale, イタリアのナポリ東洋大学での神戸大学との連携セミナーで発表(招聘)2019年9月18日~19日

松本佐保「バチカンと被爆国日本」(角川財団「バチカンと日本 100 年プロジェクト」) 長崎国際ホールにて 2022 年 4 月 11 日

上記の(1)～(3)の研究成果を出す前の段階で行った学会発表と招聘講演である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松本佐保	4. 巻 17
2. 論文標題 米国におけるカトリック保守の形成	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社大学一神教研究所CISMOR	6. 最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松本佐保	4. 巻 58
2. 論文標題 ローマ教皇訪日の三つの意義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 外交	6. 最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松本佐保	4. 巻 73
2. 論文標題 フランスコ教皇来日－核問題と地球温暖化問題へのリーダーシップ－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福音宣教	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松本佐保	4. 巻 675
2. 論文標題 カトリック教会と国際政治	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際問題	6. 最初と最後の頁 6-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 13件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 バチカンと核兵器問題
3. 学会等名 バチカンと日本プロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 米国におけるカトリック保守の形成
3. 学会等名 同志社大学一神教研究所（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 教皇ピウス12世と日本との外交関係 バチカンと国際法：戦前・戦中・戦後日本への法・政治・宗教規範の影響
3. 学会等名 バチカンと日本 100年プロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 アメリカ分科会の宗教と政治の討論
3. 学会等名 国際政治学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 アメリカのカトリックロビー
3. 学会等名 国際フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 パチカンと国連専門機関
3. 学会等名 国際関係史研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 パチカンとCSCE・OSCE
3. 学会等名 CSCE研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 アメリカのキリスト教と政治
3. 学会等名 同志社大学一神教学際研究センター（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 パチカンとグローバル・ヒストリー
3. 学会等名 日本国際文化研究所（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 パチカンとWCCのエキューメニカル活動について
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Saho Matsumoto
2. 発表標題 European immigration & refugees question and the Catholic Church
3. 学会等名 Kobe University seminar at University of Naples（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Saho Matsumoto
2. 発表標題 Vatican and the International Organizations
3. 学会等名 British International History Group（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 キリスト教民主主義と第二バチカン公会議－世界教会協議会WCCとの関係を中心に－
3. 学会等名 国際政治学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本佐保
2. 発表標題 欧州難民の検証－EUの連帯はどこでつまづいたのか？
3. 学会等名 上智大学ヨーロッパ研究所（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 MARSHALL J. BREGER; HERBERT R. REGINBOGIN, Saho Matsumoto	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Rowman & Littlefield	5. 総ページ数 322
3. 書名 The Vatican and Permanent Neutrality	

1. 著者名 松本 佐保	4. 発行年 2019年
2. 出版社 千倉書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 バチカンと国際政治	

1. 著者名 大賀 哲、中野 涼子、松本 佐保	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 258
3. 書名 共生社会の再構築 国際規範の競合と調和	

1. 著者名 坪井 秀人、瀧井 一博、白石 恵理、小田 龍哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 226
3. 書名 越境する歴史学と世界文学	

1. 著者名 松本佐保	4. 発行年 2019年
2. 出版社 千倉書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 バチカンと国際政治－宗教と国際機構の交錯－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------